

プロレタリアートと宗教

(Proletariat und Religion)

オットー・バウアー

訳 島崎隆

(島崎隆『《オーストリア哲学》の独自性と哲学者群像』創風社、2017年所収)

1 宗教は社会的・集団的な現象である

われわれ知識人ほど、集団心理的な発展過程を正しく解釈することで困難に陥る者はいない。われわれは自分たちの信念を、論証上の闘いや科学的な論争の中で形成するように教育されてきた。それゆえ、われわれにはつねに、大衆の意識の中の表象の変遷も誤って知性的に理解してしまう嫌いがあり、これら表象を新しい知性的要素の把握、新しい論証の決定的な力によって発生したと考えてしまうのである。学者たちの世界像は、現代的な研究と思考作業の成果によって作り変えられているので、学者たちと同一の過程が、程度が違っただけで、幅広い大衆の意識の中でも起こったと仮定してしまう。

集団心理的現象のこの知性的な解釈がどれほど不当であるかは、宗教の領域において、他の領域ではほとんどありえないくらい決定的に示される。一度、小ブルジョア的あるいはプロレタリアートの自由思想家〔無神論者の意味もある〕の団体で、教会の教義に対置される論証を見てみるとよい。すると、従来の教義に対する大衆的な批判が依拠しているほとんどすべての事実が、われわれの祖父たちにも、われわれと同じようによく知られていたことがわかるだろう。祖父たちが信仰を持っていたのに対して、それでもわれわれは、信仰を持たないのである。

たとえば、今日の経験上の事実はイエスの母の処女性の教義に反するが、この事実はかつての信心深い世代にも本当に知られていないわけではなかった。変化したのは、知識ではなく、知識を使いこなす性向の変化である。未熟な知識がより成熟した知識によって克服されたというわけではなく、古い信仰がただ衰えるのである。なぜなら、自らの思考と知識にもとづいて自分の世界像を形成するという力が強くなるに従って、信仰する意思是弱まるからである。それゆえに古い民衆の信仰に対する深い動揺は、必ずしも民衆における知識の普及の効果ではなく、必ずしも啓蒙の産物でもない。信仰への動揺は、むしろ大規模な経済の革新により祖先たちの生活様式から抜け出し、すべての伝統的な生活・労働・思考・価値のすべての形式の力の及ぶ範囲から離脱する、という多くの現象の一つである。父親から習った経営の方法から自らを解放し、自分の作業を人工肥料と機械によって改善する農夫もいる。祖先たちの服を捨て観光客用ホテルを建て、農業協同組合を組織する村人もいる。彼らの事例は、伝統の呪縛からの解放、合理主義の強化と同じ発展過程の場合と同様であり、自らの知識にもとづき自らの目的のために、自由で目的に合致した生活の自主的設計へと成熟する発展過程と同様の事例である。彼らはちょうど、何世紀にもわたって神聖なものとされてきたドグマに、自分の経験の事実を対置する労働者と同様である。個人の意識の中で宗教は無論、つねにそのドグマに対して直接向けられた〔合理的〕論証によってのみ克服される。しかしこれらの論証が現れ、父祖たちの神殿を破壊する力を持つこと自体が、すべての古い権威に対する動揺、古い共同体からの個々人の離脱、大衆の伝統的な束縛の段階から個人的自由と思考の独立性の段階への向上、という大

いなる過程の部分的な現象である。そしてその過程自体も、資本主義の支配下における大衆の社会的な生活様式の変革の結果としてのみ把握されうる。

宗教は最初から社会的な現象である。同じ源泉から流出し、恒常的な相互作用の中で発展する宗教的な表象と感情を持つ人々が、外的にはいかなる絆によって結ばれてはいなくても、社会的な集団を形成する。彼らに内面的に共通の宗教的イデオロギーが、彼らを宗教な共同体へと結び付ける。しかし、この内面的な共同体はいまや、自分の中から、外的な規則によって結ばれた結社、組織化された団体を――すなわち教会を設置する。この団体の官僚階級は――物々交換経済の時代におけるあらゆる官僚階級のように――支配し搾取する階級になる。その官僚階級は、強制的な手段すら用いて宗教的イデオロギーの存続を確保することと、強制的な手段すら用いてその妥当性を拡大することを目指す。なぜなら、彼らの支配はこのイデオロギーにもとづいているからである。しかしこの志向は、人民大衆自体の宗教的共同体のもっとも内面的な欲求にも一致している。というのも、物々交換経済的に生きていて、土地に束縛されている人民大衆は、異質の表象や価値判断の仕方や習俗を、罪深く異端的であり、罰するべきと感じるからである。このようにして教会は、すべての国家的な強制手段を用いる支配団体になる。近代の科学的な欲求に一致する教会の歴史はわれわれには知られていない。キリスト教成立についての探求は教会の理解にわずかしか寄与しない。近代的教会と近代的キリスト教そのものの探求への鍵は、古代史ではなく、中世史にある。

商品生産の発展による物々交換経済の時代の古い共同体の解消が初めて、古い統一的な宗教的共同体から離脱する新たな宗教的共同体もまた創設する。階級対立には文化対立が対応しているので、闘いはこの二つの領域において行われる。知識人のあいだでは人文主義、新たな科学と哲学、プロテスタント神学が教会と対抗し、そして大衆のあいだでは、民衆的な異端が教会と対抗する。ブルジョア的な文化共同体の波及と統一化に伴い、この二つの潮流は18世紀のブルジョア的啓蒙において互いに接近し、19世紀にはついに、反教會的・反宗教的・分派的なプロパガンダの幅広い大河に流入するにいたったが、この大河は多岐に分かれてもいる。近代人は、自分の生活様式の変化によってすべての伝統的な価値に対する批判に敏感になり、これによりあるときは宗教的な分野で特定の教説を批判する潮流の影響を受け、あるときは宗教そのものに敵対する潮流の影響を受け、いまや自分の知識と能力から、自ら独自の世界像をつくる。そして、あらゆる個人的な差異がこれらの個人的世界観の中に表現される。このようにして宗教は、もはや未分化の共同体の不可侵とみなされた共有財産ではなく、個人の思考と感情の成果となり、宗教は私事となったのである。個人が宗教的な問題に個人的に立場を表明するようになったので、宗教をめぐる論争はいまやこのように活発である。そしてハルナツハ (Harnach) が言うように、「キリスト教の本質と価値をめぐるのは、今日では30年前よりも多くの探求と問いがある」。それゆえ近代人はまた、法秩序もこの意識の状態に適応すること、国家が宗教を、その現在の変化に鑑みて私事として扱うことも要求する。近代人は支配団体としての教会をもはや容認せず、その社会的な作用が、それに自発的かつ内面的に所属している共同体の範囲を越えないことを要求する。

2 宗教は私事である

宗教は私事である。このことは、古い経済的共同体がもっぱら契約と現金払いによって結ばれた、自由な個人へと解消されているように、古い宗教共同体が、主体重視のかたちで解体されているということを意味する。したがって、国家も宗教結社との関係を解消し、宗教団体に対する自発的で契約的な連合のみを個人にむけて解放しなければならない。宗教のこの個人化からあらたな宗教的共同体が生じ、それらが再びあらたな宗教団体をつくり出すか、既存の結社があらたな共同体に対して適応するか、それとも芸術・科学・倫理が宗教にとって代わるかは、抽象的な歴史的思弁の問いであり、それに答えることは、今日の発展段階における宗教の正しいとり扱いにとって重要ではない。

古く硬直した宗教的共同体からの個人への分離の過程は、どの階級の中でもそれ独自の方法で起こり、すべての階級で無数の中間段階を通過する過程として起こる。この過程はあらゆる階級のさまざまな階層をさまざまな力と速さでとらえる以上、あらゆる階級の中のあらゆる瞬間で、さまざまな宗教的意識の状態が並存している。このことはもちろん、これらの並存している意識状態の中に、一つの発展過程の諸段階を認識することをわれわれに対して妨げることはできない。

3 初期プロレタリアートと宗教の密接な関係

このようにして、近代的プロレタリアートにおいても、この発展過程は少しずつしか実現しない。資本主義的に進歩した国の農業労働者たちの集団や、農村と小都市に散らばった小規模経営者たちと家族労働者たちや、小さな工業地に住んでいる鉱山労働者や工業労働者たちのところに行くならば、あるいはようやく小ブルジョア階級から分離しつつあり、地方から移住したばかりの都市の工業労働者たちのところに行くならば、とくにまた女性労働者層を熟視するならば、われわれは近代プロレタリアートのもっとも初期の段階を観察できる。これらプロレタリアートの階層はすべて（そして彼らはオーストリアのプロレタリアートの多数派を確実に形成している）、自分たちの集団の小ブルジョア的・農民的な伝統からまだ分離しておらず、宗教的共同体から脱してはいない。彼らにとっては、人生の大きなできごとのさいに、教会の救済手段はどうしても不可欠である。彼らの子ども時代の信仰に対する攻撃は、彼らの感情を傷つける。無信仰であるという非難は、これら労働者階層をめぐる闘いにおいて、われわれの敵対者のいまだにもっとも効果的な武器である。

いまやこの労働者階層も宗教的共同体を侵食している発展過程に囚われているということは、宗教に対する批判ではなく、宗教の立場からの教会の支配団体に対する批判の中に現れているのである。彼らは福音の教えを墮落した教会に好んで対置し、ナザレの貧しい大工の息子〔イエス・キリスト〕を教会の富める高位聖職者たちと比較し、工場主たちや豪農たちと一緒に食事する聖職者たちや協力者たちよりも、自分たちのことを良いキリスト教徒だと感じている。僧侶階級に反対する闘いには、これらのプロレタリアの階層は敏感である。しかし彼らは、支配団体としての教会のみを打倒したいのであって、宗教的共同体としてのキリスト教を打倒したいのではない。彼らは教会に反対する自分たちの論証を、まさに宗教的イデオロギーから借用する。イエスが最初の社会主義者であるといわれることを好んで聞く者たちこそ、彼らなのである。

徐々にであるが、プロレタリアートは伝承されてきたイデオロギーの範囲から離脱す

る。困難で刺戟に満ちた賃金闘争が労働者たちを彼らの生活の静けさから引き離す。彼らはこの闘いの中で彼らの世界のすべての権威を、敵として、憎むべき搾取者の同盟者として知ることとなった。いまや彼らにとって、自分たちがいままで信じ、尊重していたすべてが問題になった。伝承されてきたすべてのもの、つまり宗教についても、彼らは批判を手がけてみる。子ども時代の信仰からの完全な離脱は、彼らにとって重要な内面的体験であり、激しい内面的な闘いの成果である。彼らはこの体験に参加しない者はだれでも軽蔑する。彼らは自分たちがつらい闘いにおいて自らの中で克服しなければならなかったイデオロギーに対する対立を、資本家階級と階級国家に対する外面的な対立よりも強く感じる。

彼らはただ単に無信仰となるのではなく、古い信仰を憎むのである— しばしば愛が無関心になることができる前に、憎しみへと変わることがあるように。この階層は、資本主義的な生産手段に対する批判よりも宗教に対する批判を好んで聞き、僧侶階級に対する闘いを階級国家に対する闘いよりも大きな情熱をもって行うのだ。われわれに対して僧侶階級に対する闘いを宗教に対する闘いに転換するようくり返し迫り、僧侶階級に対する情熱的な憎しみからプロレタリアートの宿敵たちとさえも同盟を結ぶことを欲する者たちこそ、この階層である。彼らは疑いなくプロレタリアートの少数派を形成している。しかし彼らは、まだ宗教的に束縛されている労働者階級の多数派より、精神的にも政治的にもずっと活発な階層であるがゆえに、したがってわれわれの組織と盟友たちのあいだでもとりわけ強く代表として選出されているがゆえに、われわれの政党の生命に対する彼らの影響は大きい。僧侶階級に対するこの過剰な憎しみがわれわれにとって好ましくなく、戦術的に危険で、ときにはまた醜い現象をもたらすものであるということは、確実である。しかしこれは、歴史的進展の不可避の産物であり、労働者たちがいくつかの経済的および政治的な教条の単なる受容によってではなく、強い衝撃を与える全意識の変革において社会主義に到達するという事実の作用である。このことの本質的な根拠は次のような一般的な心理法則にある。すなわち人間は、自分をもっとも内面的に支配し、もっとも過酷な闘いにおいてようやく自らを解放することができるものを、もっとも深く憎むという法則である。これらの労働者階層が宗教に対して行う批判が、たいてい歴史的・哲学的な深化を欠いていることは確かである。資本主義的社会が労働者たちをわれわれの文化のもっとも高尚な達成物からしめ出している以上、これ以外の状況はありえないのではないだろうか。

4 われわれは反宗教的プロパガンダを行うことはできない

しかし激しい内面的な闘いにおいて、伝承されてきた表象への思考なき束縛から自らを解放したこの人々を、シュトラッサー同志がしているように「無神論的な聖徒集団」と嘲笑することは、もっとも危険な知識人の傲慢の兆候である*。確かにいくたの同志たちが僧侶階級に対する闘いをわれわれの階級闘争の特別な部分として認めず、階級闘争の必然性をその闘いに少なくとも一時的に従属させたがるのは、ときおり有害な作用を及ぼすかもしれない。シュトラッサー同志が主張するように、ボヘミアのいくつかの小都市で、われわれの組織における仕事が、熱狂的に鼓舞された自由学校への参加により被害を蒙ったことも同様である。だがこのような現象は、その根拠を広いプロレタリア的大衆の感覚の中に持ち、プロレタリア意識の全体的な発展に根ざしているのも、つねに避けられるわ

けではないことを認識しなければならない。確かにこれらの危険と闘うことはわれわれの義務である。しかしわれわれは、プロレタリアートの大衆の心理的な欲求を満たされないままにしておくことはできず、それどころか、シュトラッサー同志が忠告するように、まさに彼らの欲求に逆らうことはできないのである。

*おそらくは、社会民主党の幹部で、のちにライヒエンベルクの左派に属し、オーストリア共産党の創始者の一人となったヨーゼフ・シュトラッサー（1870—1935年）のことだろう。〔本文註〕

われわれは反宗教的プロパガンダを行うことはできない。プロパガンダによって、われわれはまだ宗教的に束縛されているプロレタリアートの多数派の、権威に対する信仰を揺るがすことはできないだろう（というのも、社会的な生活様式の変化が伝承されてきた価値の批判に対する感受性をまだつくっていないところでは、われわれの言葉は効果を持たないままであるからだ）。むしろわれわれは、最重要課題として勧誘している大衆の感受性を傷つけ、彼らを僧侶階級の扇動の餌食にしてしまうだろう。われわれは神と世界に関する教説をめぐってではなく、社会的および政治的な制度のために闘うのだから、政党として反宗教的プロパガンダを必要とはしない。しかしわれわれは労働者政党に属しており、無数のプロレタリアたちの欲求に満足を与えないわけにはいかない。

われわれが政党として行動する場合は、大衆をわれわれの政治的・経済的・社会的な要求のための闘いに要請しなければならないが、政党としてはわれわれはいかなる信仰も、また無信仰も支持してはならず、あらゆる信条がわれわれにとって神聖でなければならない。だが、われわれは個人に対して、われわれの組織の中でも政党の外でも〔世界観に関する〕大いなる謎の答えを探ること、その人がその答えとみなしていることを表明すること、このことを禁止できない。そして、この探求と表明が無数の者たちにとってやはり避けられない欲求である以上、政治闘争において、世界観に関する問いに関心を向ける者の意識にとってとくに重要と思われる彼らの欲求の側面を、彼らが特別の重みをもって強調することもまた禁止することはできない。

5 宗教そのものではなく、社会制度が問題である

階級の一般的利害と、その一つの層の、その一つの発展段階の特別な利害とのあいだの矛盾から生じる困難は、僧侶階級とそのブルジョア的敵対者たちの本質についての演説と論説によって克服されることはできない。プロレタリアートの発展が自らそれを克服するのである。われわれの大都市と工業地域では、子ども時代を信仰のない家庭で過ごし、宗教がわずかな学校の授業についての思い出以上ではない、そういった労働者層は増え続けている。彼らは伝承された宗教を一度も本気で愛したことがないので、それを憎んではない。彼らの意識はもはや自分の信仰からの困難な解放によっては規定されておらず、彼らはわれわれの組織の中で、とくに労働組合の中で教育を受けたのである。彼らの利害は経済的および政治的な目的に向けられている。彼らは僧侶階級に対する闘争を自分たちの階級闘争の一部として行っている。彼らは意見をめぐってではなく、制度をめぐって争う。多分彼らはまだプロレタリアートの小さな部分でしかないが、確実にもっとも成熟した部分である。プロレタリアの他の階層も彼らのようになるだろう。

いまやこの発展に、われわれの理論の変化も対応している。マルクス主義の理論家たち

の比較的古い世代は宗教に対する闘いも理論的な分野で行い、このために自然科学的唯物論を利用した。このようにしてわれわれの歴史観とわれわれの経済学は共同君主連合によって自然科学的唯物論と結びれたのである。より若いわれわれは、宗教をめぐる深刻な闘いを行う必要はもうなかった。われわれの哲学的関心はそれよりもずっと、方法論的な考慮によって引き起こされた。だからわれわれは、われわれの科学を哲学的体系とのあらゆる結合から解放した。いまやわれわれの歴史観とわれわれの経済学は非常に多様な認識論的な見解と結合するよう見えるのであり、またたとえば、生物学がカントからも、マッハからも、アヴェナリウスからも、ディーツゲンからも、さらに自然科学的唯物論からもその研究成果の確認を必要としないのと同程度に、多様な見解から独立しているように見える。

プロレタリアートのもっとも成熟した階層にとって、僧侶階級に対する闘いにおけるわれわれの戦略に関して、および自由学校への参加が目的にかなっていることに関しては、疑問の余地はまったくありえない。その階層は、特定のブルジョア階層に影響を及ぼすことを望めるところでは、この団体を支援するだろう。そして、この希望がないところでは、これから離れるだろう。しかしもしまだ成熟していない、ようやく目覚めつつあるプロレタリアートの階層が、僧侶階級に対するあらゆる新しい戦闘手段をあまりにも過剰に歓迎するならば、またこの階層が多く数の戦闘形態と戦闘の機会を、冷静な政治的熟慮にとって正しく思われる以上に高く評価するとしても、そのときわれわれは、彼らが真の心の欲求を実現することを妨げられないし、妨げるべきでもない。

宗教は私事である。われわれの政党の綱領のこの命題は、宗教的意識の発展傾向だけでなく、宗教的共同体の主体主義的な解体を簡潔にまとめている。この命題は国家に対する要求を言明しているのみならず、われわれの戦略の最高の規則も含んでいる。そして、われわれもまた宗教を私事として扱わねばならず、僧侶階級に対するわれわれの闘いは制度に対して向けられ、宗教的表象や感情に対してではない。この考えは宗教的無関心に対応しており、プロレタリアートのもっとも成熟した階層の、圧倒的に政治的および経済的な方向に向けた利害関心に対応している。伝承からまだ離脱しておらず、ようやく段々と小ブルジョア的および農民的な価値判断の様式から上昇しつつあるプロレタリアートの階層の獲得をめぐるわれわれの闘いがこれを要求している。

6 宗教を党の事柄にしてはならない

しかし、労働者階級のもっとも成熟した層とまだまったく教育されていない階層とのあいだに、世界観の問題に対して強い関心を寄せ、僧侶階級に対する闘いを特別の情熱をもって行う大人数の集団が存在する。この場合たしかに、われわれはこの集団によって指示されている道から外れることになってはならないし、また宗教を党の事柄にしてはならず、さらに階級闘争を文化闘争の中で消滅させてはならないが、しかしこの集団に、プロレタリアートの全体的な発展に根ざしているその欲求を、われわれの組織の内部と政党のかたわらで満たすことを妨げようとしてはならない。自由学校は党の制度ではないし、そうなるべきでもない。だが、僧侶階級に反対する勢力が集中している場所ではどこでも、そこで自由学校がともに活動するのを妨げようとするれば、われわれは多数の労働者たちの感情に対立することになるだろう。より賢明なのは、われわれの同志たちが自由学校にお

いても、まさに同志として行動するように配慮することである。これはいままでときおり起こらなかったとしても、可能である。僧侶階級に対する闘いがとりわけ学校の分野で行われれば、この戦略は、われわれにも非常に歓迎されなければならない。だからこの戦略は推奨される。自由思想家の同盟から自由学校への道程はわれわれの発展の方向に向いている。すなわち、世界観をめぐる闘いから制度をめぐる闘いへの進歩の方向に向いている。

僧侶階級に対する闘いにおいて、往々にして間違いが犯されることをわれわれは否定しない。しかしわれわれは、誤る機会をいつも臆病に避けることはできない。われわれの戦略は無味乾燥の政治的打算のみによっても、また政治的および経済的にのみ規定された血の通わない階級の抽象化によっても指示されることはできず、プロレタリア大衆自身の生き生きとした欲求によって規定されるのである。労働者はわれわれの運動によって、決してその政治的および経済的な利害のみをもって捉えられるのではなく、その全存在をもって捉えられる。われわれは労働者の利害のみを代弁してはならない。利害の階級イデオロギーとそのイデオロギーの発展のあらゆる段階とが、われわれの運動の生き生きとした現実の中にその表現を見出さなければならない。

〔訳者付記〕

原典は、Otto Bauer, Proletariat und Religion, in: Werkausgabe, 8. Band, S. 141-149, Europaverlag, Wien, 1980. である。もともとは、『闘争 Der Kampf』第一巻、537頁以下、に掲載されたものであり、Karl Mann の筆記とあるから、本来はバウアーの演説か何かであるかもしれない。本文中の斜字体の部分には下線を引いた。本文中の〔 〕は、訳者の補った箇所である。一段落の長い部分は、いくつか段落を分けた。そして六つの節への区分は、訳者が内容のわかりやすさを考慮して付加した。

オットー・バウアー (1881-1938) はオーストリア派のマルクス主義者・社会主義者の一人として日本では知られており、当時のウィーンの社会民主労働者党の理論家であった。ユダヤ人である。なお彼には、『社会民主主義・宗教・教会』(1927) という著作もある。日本ではすでに最近、大著『民族問題と社会民主主義』(丸山敬一・倉田稔他訳) 御茶の水書房、が出版されている。(島崎隆)

〔解説〕 政治・政党は宗教をどう扱うべきか？

島崎 隆

以下、この論文の意義を、レーニンの宗教政策論などと比較しつつ、簡単に提示したい。この論文は社会主義の立場から、宗教に関してきわめて深い理解を示している。その立場は、基本的に史的唯物論の認識にもとづいているといえるだろう。バウアーによれば、第一節に明示されたように、宗教は民衆の生活習慣と宗教的共同体のなかに息づいているので、それを知識人がやるように、合理的批判と啓蒙によって、単純に否定することはできない。バウアーは明快に、近代の啓蒙主義がやるような「集団心理的現象のこの知

性的な解釈」を批判する。宗教の非合理性を示したとしても、それだけでは宗教はなくならない。この点に関して彼は、「危険な知識人の傲慢」（第四節）にすら言及する。そして近代では、宗教は変貌し、共同体の産物というよりも、「個人の思考と感情の成果となり、宗教は私事となったのである」。これは、教会的位階制度を廃止し、聖書と個人の内面の良心に依拠したプロテスタントの宗教改革に示される事態だろう。バウアーはこの事態を、共同体をまとめる価値観という宗教のあり方から、個々人がおのれの主観に従って、「主体主義的に」宗教にアプローチする事態への変化と総括する。そこで、まさにバウアーは、「宗教は私事である」と強調するのである。

もちろんこうした宗教の認識には、当時の社会民主党がいかに宗教と民衆に対応すべきかという実践的課題が控えており、この課題がつねに本論文の叙述のなかに意識化されている。第三節でバウアーが初期プロレタリアートと宗教生活の密接な関係を展開したことも、慎重でリアルな配慮といえるだろう。彼ら民衆にとって、宗教と生活は一体化しており、だから安易に宗教を批判することは彼らの心を傷つけるのだ。したがってまた、彼らが社会的矛盾に目覚めるのも、宗教的脈絡にそってであり、教会への批判もそれが本当のキリスト教に合致しないからという理由でおこなわれる。こうして彼らは、イエスが「最初の社会主義者」であるというような表現を好むのである。

だから彼らが子ども時代から親しんできた、宗教の非合理性に真に目覚めるとき、徹底した内面的な葛藤をへなければならぬこと、このことをバウアーは見逃してはいない。

「彼らは自分たちがつらい闘いにおいて自らの中で克服しなければならなかったイデオロギーに対する対立を、資本家階級と階級国家に対する外面的な対立よりも強く感じる。彼らはただ単に無信仰となるのではなく、古い信仰を憎むのである。」僧侶階級への闘いを階級国家への闘いよりも優先するという考えは、もちろんバウアー自身の理論によれば、誤りであり危険でもある。だが、私が感心したのは、そうした民衆の気持ちを尊重し、ある程度、そうした傾向をバウアーが許容していることである。つまり真理はわれにありとして、蒙昧な民衆を上から指導するという態度を取っていないということである。

第四節で、「われわれは反宗教的プロパガンダを行うことはできない。プロパガンダによって、われわれはまだ宗教的に束縛されているプロレタリアートの多数派の、権威に対する信仰を揺るがすことはできないだろう」と指摘されることも、いままで述べてきたことの帰結である。つまり政党は、反宗教的プロパガンダをおこなってはならない。政党は宗教や信仰とは無関係である。同様に、第六節にあるように、「宗教を党の事柄にしてはならない」。「世界観をめぐる闘い」は党の主要課題にならない。むしろ大事なのは、社会制度をどう批判し、変革するかである。だがここでもバウアーは、民衆中心の柔軟な考えを打ち出す。つまり第四節にあるように、彼らが党組織の内外で、世界観に関する「大いなる謎」について、つまり人間は何のために生きているのか、などの哲学的・倫理的な根本問題について議論したいと考えたとき、それを禁止することはできないというのである。いずれにせよ、大事なのは、宗教そのものを問題視することではなく、「世界観をめぐる闘いから制度をめぐる闘いへ」という方向の転換である。

レーニンの宗教観やマルクス・レーニン主義の社会主義の内容をある程度知っている者ならば、ほぼ同時代人でありながら、この考えとバウアーの考えがまったく異なり、ことごとく対立していることにただちに気づくだろう。周知のように、一般的にも、このオー

ストリア派のマルクス主義・社会主義がソ連のマルクス・レーニン主義に対立していたのである。

私は拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』（こうち書房、第一章など）で、ソ連・東欧のマルクス・レーニン主義が世界観政党として、世界観や宗教を党の事柄としてきたことを、「崩壊」後の反省として明らかにしてきた。このさい私は、政党や国家が宗教やさらに広く哲学や世界観をいかに扱うべきかを、マルクス主義にそくして「外部問題」とみなし、その哲学自身をいかに体系的かつ実践的に展開すべきかを「内部問題」とみなし、両問題を区分して論じた。さらにまたレーニンが、「宗教にたいする労働者党の態度について」というような論文のなかで、無神論であるマルクス主義が宗教にたいして呵責のない闘争を、階級闘争のなかでおこなうべきだ、と述べたことをいかに評価すべきかについても検討してきた。レーニンは宗教評価の点で、全体として近代の啓蒙主義の枠内から脱してはいないといっているだろう。バウアーはまさに、執拗にこうしたレーニンの見解を批判したのである。この点では、上島武氏が「ロシア革命と宗教」（『QUEST』第三三号、二〇〇四年）で明示したように、たしかにマルクスとレーニンでは宗教への態度がはっきり異なるのである*。マルクスは近代の啓蒙主義を抜け出ており、まさに近代の資本主義批判を中心としたのである。

*さらにソヴィエト共産党の、宗教への対応の紆余曲折に関する詳細な展開に関しては、上島武「続・ロシア革命と宗教」（『カオスとロゴス』第二六号、二〇〇四年）が有益であった。

第五節でバウアーは、自然科学的唯物論を利用し、宗教に闘いを挑む「比較的古い世代」と、自分たち「若い世代」とを区分したが、まさに「古い世代」には、内容的にレーニンらが妥当しよう。いやここでバウアーによって書かれたすべては、ことごとくレーニンのな、マルクス・レーニン主義の宗教や世界観にたいする立場へのきわめて的確な批判となっている。それでもなお、私見では、哲学的世界観と政治の関係はまだ問題として残っていることも付加されるべきだろう。

そして最後に考えなければならないのは、なぜバウアーらによって、まさに現代的といえるような柔軟ですぐれた考えが、当時のオーストリアで生まれたのかという問題である。そのとき、ハプスブルクの重厚で豊かな文化的遺産を継承したオーストリアと野蛮なツァーリのロシアとの文化的差異に思っていたのではないだろうか。まさに当時のウィーンなどの都市文化のなかで、政治に関係するかどうかは別として、「家族的類似」（ウィトゲンシュタイン）程度のつながりでもって、多分野のそうそうたる知識人・文化人が多数、交流していたことが思い起こされる。文化的・市民的成熟がなければ、そして人間それ自身への深い理解がなければ、経済も政治も結局はうまくはいかないだろう。